

協同労働と人間の発達を求めて II(その2)



アサーション

大田原赤十字病院 看護師研修ドラマ・スクールでの実践(下)

荒木昭夫(協同総研顧問)

<6. アサーションということば>

これは大田原赤十字病院・看護師「卒後5年研修」の中でとりくまれている「劇創り・集団づくりと表現の教室」での報告、第2段である。

彼らはこの種の研修のことを「アサーション」と呼ぶ。演劇人である筆者には初めて聞く言葉だったが「assure(確信を持たせる)」の名詞化かと思われる。なるほどそうか。「卒後5年研修」となれば、看護現場では「バリバリの中堅看護師」になるうとする若者たちの研修である。確かにこの先、その職務を全うするには、「確固たる確信」がいる。そうか、これはそのための研修であったのか。そう気づいたのは、次の手記を読んだときである。

・郡司洋美 A館 - 小児病棟「ハエはなんでも知っている」班

私たちは、ハエと患者と看護婦を題材に選んで劇を創りました。

「そんなに真面目にやらなくても。もっと遊んだら？」という先生の言葉で、ふと「分かった」のでした。

白衣を着て、清潔なはずの看護婦は水虫、病院には居てはいけないハエ、本当は居そうなんだけど、居たら困る糖尿病の看護士。

結果は病院に居ても治らないという「オチ」で、終わってみれば本当に遊んでしまったという感じでしたが、終わった後の「真面目にやると辛くなる」と言う先生の言葉の意味が分かったような気がしました。

本来は真面目でなければいけない仕事の中で、自分を抑えてばかりでは辛いかな、時々には開放することも大切なのかな、と思いました。今回は自分を知る機会であったように思います。劇を創る過程で、こんな時はこう考える、こんな時はこう反応する、そんなことが徐々に分かっていったように感じました。私のストレス玉も減っていったかなと思いました。気持ちの切り替えも大切で、開放してあげることの出来る人間は、また苦もなく集中することの出来る人であるように思いました。

・柳田美里 B館 - 3F「ハエはなんでも知っている」班

卒後4年目となり、徐々に自分の意見が言えるようになってきました。ただ、大勢の前だったり、年上の人の前だと、意見を言うことで周りから批判されるのではないかと、という思いから言えなくなる時もありました。自己主張ということと、そういった周囲からの評価を気にしている自分に対して、何か違う受け止め方ができるきっかけとなり、新たな自分を見つけたいと思い



アイデアがポンポン出てきました。そこで自分を解放するということは、どういうことかと考えてみました。

私は仕事をするようになり、白衣の自分と私服の自分は違う気がしています。白衣の自分は、患者さんや先輩ナースから言われたこと

ながらこの研修に臨みました。

講義では、体の動き、五感を使ってのコミュニケーションのとり方を学びました。私は看護婦なので、そういうことは知っているつもりでした。しかし、目からの訴えで、その気持ちが伝えられること、伝わること。手の感覚で、何を触っているのか、誰を触っているのかが分かること。体の動きで沢山のことが表現できることを学びました。ここでは自分の主張を表現するには沢山の表現があり、逆に相手からの主張にも同じように沢山の表現があるんだと気づき、相手の主張にももっと敏感になろうと思いました。

劇は、やはり医療が題材になりました。他のグループも医療の内容で、みんな私生活でも仕事から離れにくいのかなと思いました。私たちのグループは初め、シリアスな内容となりました。しかし先生に「もっと遊んだら？ 自分を解放して。」と言われました。そう聞いたらとても楽になって、ア

は素直にそのまま受け入れられ、注意点であっても素直に自分を振り返れます。一方白衣を脱ぐと、その反発なのか、わがままになったり、相手の意見を聞かない時があります。これは、気がつかないうちに、私生活で自分を解放しているのかなと思いました。とすると、この研修では、自己主張だけでなく、仕事から離れるということ、自己解放するという目的もあるのだということに気づきました。仕事でのストレスは、自分を解放することで発散して行こうと思います。そうすることで生き生きと仕事ができると思います。何よりらくりん座のみなさんからパワーを貰いました。私も患者さんにパワーをあげられる看護婦になっていきたいと思いました。

なるほど。こうした「演劇的アサ - ション研修」を通過して、つまり自己を解放し、開放したナ - スたちは、自分の姿を自分で

客体視できるという過程を経験しているのだと理解した。

前は「癌告知」に関わる劇づくりを中心に報告したが、それは病院という職場に於けるナースたちの、ごく身近な生活の場から見た風景であった。今回は、リアルに見たものを更に見据えて、その底に内在する問題を抽出し、形にして見せるという段階に入った諸例が紹介できる。以下は2年目の作品である。

<7. 「命の玉」(02年作品)>

ここで「命の玉」と名づけられたものは『生命体』とでもいうべき概念となる。

我々のドラマスクールは、画用紙に「絵」を描くことから始めるが、このチムの中に重度障害児の姿を描いた看護師がいた。それが自分の最大の関心事であったのだろう。

他に妊婦と胎児の絵を描いた人も居た。

鶏と卵とひよこを描いた看護師も、またキャベツと虫と殺虫剤を描いた人もいた。

これらはすべて、これから創る我々の即興劇に使用する「ドラマ材」となる。

重度障害児か。これは重いテーマだよな。それをやるのかこのチムは。...

講師の方はハラハラ・ドキドキである。関わり始めれば四苦八苦して、今夜は深夜にわたるだろうし、取り組まなければ「何故避けて通ったの」などと彼らをなじることになるだろう、と思ったからだ。

彼らは議論を重ねていた。

「ここに揃った材料は、みんな命の問題ですわね」。これがこのチムの共通項だった。「どんな命だって初めの命は元気なのよ」。これが次の共通理解になった。

「メーテルリンクの『青い鳥』には生まれる前の赤ちゃんたちの国があってね、そこでね、誰のお腹から生まれることになるのかなって楽しみにしながら、ピョンピョン飛び跳ねて待ってる世界があるんですよ」。

そうか。生まれる前の命たちって、形はまだ、決まっていけど、DNAであったり、ミトコンドリアとの合体であったりするんだ。およそこの世に「命の元」と言えるものは既にあっただ、うんとうんと大昔から。という認識にこのチム



は到達していた。だから物語はこうなった。

ポヨン ポヨン。ピヨヨン ピヨヨン。玉が跳ねていました。いかにも楽しそうでした。いいことがあるぞ。もうすぐ、とってもしいいことが始まるぞ。僕はそこへ出かけるんだ。もうすぐ、行くんだ。そして玉たちは、口々に言いました。

私は白い犬になるのよ。プチプチッとして、フワフワッとして可愛い。

私は蚊になるんだよ。そうして人間の血をうんとうんと吸ってやるんだ。

それじゃあ、すぐにパチンって叩き潰されちゃうよ。

大丈夫だよ。負けるもんかい。

そうです。この玉たちは、生まれる前の、元気な命の玉だったのです。その中に一人、何かしょんぼりしている玉がありました。

どうしたの？と仲間たちが聞きました。

うん。僕は人間の子どもに生まれることに決めただけで、でもその人が、僕を生む決心がつかないんだ。

そうか、それは心配だな。...

場面は変わって、病院の一室。待っていた医師の前に若い夫婦。

医師 ああ。この前の検査ですが。お腹の中の赤ちゃんは、何万人に一人という病気です。出産はどうされますか。ご家族でよくご相談下さ

い。

「あの...、その病名は？」と聞く夫婦に、医師はしばらく考えていて、「それは、...難病です」とつぶやいて、逃げるように去りました。

お家では、家族が待って居ました。夫婦の「難病」だという報告に、親戚一同、察知が早くて出産には猛反対。

産もうか、産まないでおこうか。思い悩む夫婦の肩を優しく叩くのは、その小さな命の玉でした。若い夫婦の決心は固まりました。

オギャア - ! 元気な赤ちゃんの誕生の声が響きました。

上演後「重いテ - マなのに、明るく創って戴けてよかった」と感想が述べられた。そう語った女性は医療福祉リハビリ - センタ - に勤務する看護師、伊藤都だった。彼女は続けて、

「ここで言われている『難病』ですが、他人の子どもさんのことなら言うのはやさしいのですが、もしそれが自分の子であったとしたら、そう簡単に結論の出せる問題ではありません。」

合評の場でも、このことばをみんなはずっしりと受けとめて言葉少なだった。

<8. 「命の玉」班のナースの手記>

・大田原めぐみ 赤十字病院 A館小児病棟
とりあえず身近なことから考えてと、話し合いましたが意見がまとまらず、夜になって焦りも出てきました。だんだんに「これは対立ではない」と、先が見えなくなり、

21時を過ぎてから新たに内容を変更しました。

しかしみんなで「変更しよう」と決めた時には初めて心が一つになった様な気がします。やっと、「ここは違う。こうした方がいいんじゃないか？」などと、

いつのまにか自分それぞれの意見を言い合うことができていました。

障害を持って生まれてくるかも知れない子を産むか産まないか。悩んでいる両親を劇にしました。これは私たちの永遠のテーマです。

・相馬幸子 大田原赤十字病院 重度障害児の命の玉を演じた。

28日の朝、らくりん座が近づいてきた時、突然林に入り込んでおとぎ話の世界に入っていくような感覚になった。ここからは、演劇の世界なんだと感じた。「千と千尋の神隠し」の始めに、ひとつの建物のトンネルをくぐり抜けると別の世界に入り込んでゆく、そんな感覚を感じた。中に入ると「トトロ」が出てきそうな感じがして、うれしかった。

ドラマスクールって？と思った時、きつと劇をする中で何かを学ぶのだということは想像できたし緊張したが、この雰囲気であんまり安心するものがあった。



—感性を大切にしたい—

最初に「対立するもの」を考えて表現することから始まったが、自由に表現することを求められる時に、浮かんでくるものが少ないのはかなしいことである。感性は、磨けるものであると思うので、日頃から感じることを、考えることを、表現することを意識できれば良いと思う。感性は、豊かにして生活したい。

—共通理解することは、とても重要なことである—

説明してすぐ判って貰えることと、なかなか判って貰えないものがあることを劇を創る中で実感した。出来た！と思って始めたのに、うまく進まず、初めから考え直すことになった。もう深夜になるころであった。「すんなり言葉が出てこないのは、みんながそのことを良く理解していないからだ」と先生に言われた。

疲れていたが、何か違うと感じていた気持ち吹っ切れた。絵や言葉で理解したと

思って始めても、表現したいことの焦点があっていない。みんなが考えていることがずれているのかも知れない。話し合いの段階で十分に表現出来なかったことがあったと思い、もう一度自分の話を皆に話した。自分の考えだけを押し切っているようで少し気が引けた。初めからやり直したが、そこからはみんなが動き出した気がした。

私は話し合いの時に自分の気持ちに妥協していたのかも知れない。人の話しを良く聞いて生かしたいと意識していたが思い上がりである。講義の時に、「十分に話しなさい。自分の考えを充分に出さないと人の話は受け入れられない」と。言われたとおりだった。妥協することは、結局は遠回りになってしまうのだと感じた。6人で何かを表現しようとした時初めて、話し合い理解しあうことの重要性に気づくことができた。

劇団の山本さんがいろいろと教えてくれた。対立するものの考え方、表現の方法など、みんなの考えをどうしたら上手に表現できるか、劇の技法を通して導いてくれた。押し付けることなく目標に向かわせる、リーダーの役割はこんな風にできたらいいなと感じた。

どのグループの内容も、訴えたいことが良くわかった。すなおに内容に同感できるものであったし、それぞれの工夫が素晴らしいと感じた。その中でも自分たちのグループが一番すばらしくできたと思うことで、そう思えることがとても嬉しい。

前回で取り上げていた、「癌告知」では、告知を受けた患者が、どう考えたかというその人間の心理の内奥には入り込めていなかったことを問題点としておいた。1年後のこの作品となると、「生命の玉」という手

法を使って、心の中に入り込めた。それもまだほんの少々というレベルではあるが、この発想は前年度作品「ストレス玉」の発展でもある。

次に厳然として我々の前に存在している「競争社会」の抽象化に成功した例。

<9.「どこへいくの?」(02年作品)>

女1, 2, 3, 4, 5がほぼ一線に並んでいる。

それぞれが石らしき物を拾い、前へ投げる。投げた所まで進む。何か「石蹴り」のゲームのようだ。別の所に怖いおばさんが居る。「おい! 何してるんだ。だからサボってるんじゃないよ」。

この人も一人熱心に努力して働いている様子である。

石拾い、石投げにも拍車が掛かったようだ。

女1は、石を遠くまで投げて、その場所まで進む。「私には目標があるのよ」。

女2は、それには届かないがかなり進む。「私ね、資格が欲しいの」。

女3「休みが取れて月給が上がればそれでいいわ」と、何歩か進む。

女4は既にかかなり出遅れていて「私、目標と言ったって」。

投げる石は、ほんの手前でポロリと落ちる。

女5。もはや前には進まない。落とした石は、他の4人とは別の方向へと転がって行く。女5は「逡巡」する。戻ろうか。このまま石の転がるままに、と進もうか。

長い思案の末に、この女は、他人とは違う別の方向へ、つまりそれがこの人の思う方向へと、思いっきり石を投げ、そこへ

向って駆け抜けて行った。つまり潜在的にあったであろう本心の方向へ、であった。

先に紹介した医療福祉リハビリ - センタ - 勤務の伊藤都さんが、この女5を演じたのである。その「逡巡」の間は1分ぐらいか。舞台空間での1分とは随分長い沈黙の時間が流れて行ったのだけれど、その心の中の動揺が良く現れていて共感を得た。

<10. 「どこへいくの？」 班のナースの手記>

・吉成志乃 大田原赤十字病院 A館一般病棟

卒後4年目教育としてこの研修に参加しました。4年目は病棟の中でも中堅のグループに属するようになり、夜勤などでは、自分が一番上の立場になったり、患者・家族との重要な話し合いの場に参加したり、病棟内発言が求められる機会も増えます。そのような中で、適切な対応や発言を行う際にこの「学び」が活かされてくるのではないかと思います。

同じ看護師とはいえ、初めて会う、職場も経験年数も違うメンバーが、知らない相手に自分の想いを伝え、理解してもらうのは、気の知れている人へのそれと比べ数倍もの労力が必要でした。

私たちは、劇のテーマとして「看護を続けていく中での戸惑い」を選びました。グループには様々な年齢層がいましたが、このテーマは誰もが一度ならずとも経験したことがあり共感出来る事柄でした。しかし劇としてどのような表現方法をとるべきか。それは初めての経験で、その壁に何度もぶつかりました。

看護職を行って行くうえで、「誰かに何かを伝える」という作業はとても重要です。今回の研修は、「伝える」ことの難しさ、見知らぬ人と早くに理解しあえる関係を築くことの難しさを学ぶ良い機会となりました。また自分とは違った考えを持つ看護師の「役」を演じることで、人それぞれの心の動きの違いを知ることができました。(傍線筆者)

・伊藤都(国際医療福祉リハビリテ - ション センタ - 那須療護園)

女5を演じた

この研修に参加した動機となったものは、大田原日赤の卒後教育として行った(第1回の)「ドラマスクール」の感想を昨年の今ごろ、友人から聞いたときで、研修内容に興味を持ち、機会があったら是非参加したいと思っていた。

車一台がやっと通れる雑木林の道を300メートルほど進むとそこに「らくりん座」があった。映画の「トトロ」を思い出させる風景が広がり、タイムスリップでもしたかのようであった。研修中の劇団の方の私たちへの対応も格好をつけたりせず自然で、自分も役職をはずしてありのままに居ることができたこと、劇団と言う別職種?の方との考え方の大きな違いを知ったこと、らくりん座の「贅沢のない暮らし」も別世界に来たように感じさせてくれた。

このドラマスクールの目標は、1)言いたいことを言う、2)言いたいことを相手に伝える、であったが、私自身が学びたかったことは、「演じる」ということは、どのようなことなのかを体験を通して知ることであった。

i)人は知っていることしか表現できない。知らないことは表現できない。

ii) 集中すると見えてくる。集中すると周りが気にならない。

…と理解した。

私の役は「落ちこぼれネズミ」。同期の仲間はずいぶん前に進んでいるのに、このネズミは前には進めず悩む役。リハーサルのたびに「落ちこぼれになりきって。その落ちこぼれに自信を持って声を出すように」とアドバイスを受けた。

自信のない人物の役を、自信を持って演じる、と言うのはどういうことなのかと、本番前まで考えた。よく分からないがこれが最後。動作を落ち込みの格好にして、発声は見ている人に向けてやって見た。

「声が良く通っていました。それが『なりきれた』と言う事です」と終わってから先生に言って頂けた時は本当に嬉しかった。

「真実を掴み、伝えていく」と言う点で、演劇と看護は一緒であると教えられたが、それは舞台の行動でも、生活の中での自分の

何気ない行動も「何かを演じている」という形で、コミュニケーションをとっているのだという意味だと理解した。

いつもと違った環境の中で時間が過ぎるのも忘れてしまうくらい集中できる、楽しく学びの多いこの研修を今後も続けて欲しい。さらに多くの人に参加できることを望みます。

こうして書きとめられたこれら看護師たちの手記から、この「集団づくりと表現の教室」の研修手順と内容、そして何よりもアサ-ション。「確信を持たせる研修」の意味を汲み取って戴ければ幸いである。

<まとめ>

「協同労働」。以前からこのことばに引き付けられて来ていたのは私が演劇を職業としてきたからである。

「協同」と言うことばは「ともに心と力を合わせ、助け合って仕事をする」と広辞苑にある。

「演劇」は、今も昔も「ともに心と力を合わせ、助け合って仕事をする」でなければ成り立つものではなかった。

「演劇」という芸術行為は徹頭徹尾「人間」のことを考え、人間



の肉体を媒体として表現する芸術分野の活動である。演劇は当然のこと、常に「より良い質」の舞台創造が求められるし、自ら進んでその質を創造していなければ、すぐにも観客にそっぽを向かれ、職を失うと言う芸能なのである。

そしてまた我々「協同組合人」は常に「よい仕事」をなさんとし、21世紀の新しい働き方の一つとしてこの「協同労働」の協同組合法が提唱されてきた。

協同とは何か。それはどのようにして組織され形成され、協同の質を高揚させて行くのか。さらにまた協同労働が、どのような筋道で人間の発達に役割を果たして行くのか。

創造活動と協同労働と人間の発達。この関係を具体的な例証で検証しなければならない、と演劇人である私は思い続けて暮らしてきた。この看護師たちとの研修もその一環として、筆者はこれに取り組んでいるものである。

主催者代表の一人、栃木県北部看護協会の刑部洋子氏はこう述べて、この日の研修を閉じた。

「あなた方の、普段の仕事場では見せていない姿を、今日は見せて戴きました。また題材はすべて身近なものでした。途中で『劇の発表には点数が付けられるのですか?』という質問をしに来られた人がありましたが、そんな心配の一切要らない、みんなで一緒に満足できる研修でした。」

01年、02年、2年続けてお世話係りの上杉みつえ看護師長からは、後日分厚い封書が届けられた。

受講生は、帰ってきてから病棟でいろいろと話をし、他のスタッフより「受講

できて、うらやましい、私も参加したかった」などと言われ、実のある研修となったようです。

先輩として、今回の「気づき」を維持できるように、働きかけて行きたいと思います。受講生の感想、送付致します。敬具

こうした研修が、一部幹部の、誰かの思いつきだけで恣意的に行われているのではない事が感じとれる。職場がそれを求めているのである。「看護の質」を高めたい、質の高い職場にしたい、と職場の幹部集団が自らに求めているのだと思う。しみじみとそう思えて、こみ上げてくるものがある。

以上